

うろこアンソロジー 二〇〇三年版



うろこアンソロジー 二〇〇三年版 目次

海星の	石川為丸	3
まふゆ	妖怪の一本指	5
ジャンヌ・ダルクの涙	有働薫	7
〈進む〉	TISATO	10
海亀のいる温泉	清水鱗造	12
looking at the world through a bulletproof plate glass window		
洗骨	河合民子	17
夢の馬	高田昭子	20
忘れっぽい会話	K・A氏に	23
桐田真輔		
サラサラドライ・ミミーママ	(子供用おむつ)といちばんパンツ (大人用)	26
青木栄瞳		
夕餉	萌木碧水	28
南風原	若井信栄	32
(163・67・21) × (179・93・42)	田中宏輔	34
偶感二十八	倉田良成	43
小鳥	足立和夫	48
関富士子		
欠片を踏んで	—ある新聞配達の少年に	51
秋へ、落ちて	—些細な償いについて—	56
富澤守治		

海星の

石川為丸

どこへいったの？

死んだ人たちはどこへいったの？

しきりに尋ねている

ここは沖縄、南の暗がりにならずくまる病犬の

疥癬ひろがる山河にて

つぶれた観光ホテルの暗がりには

シャボン玉を吹く悲しい老婆（おばあ）がいる

石門にみえかくれする南国の蝶を追いかけ

キツチャキクルビした

私の青

行くも帰るも 三里塚

それは一九七〇年の冬でした。母親が癌で入院したとき、私は組織の任務を優先して、見舞いにも行きませんでした。そしてあまりにも急な母の死でした。葬式だけは顔を出しましたが、五年ぶりに会った姉をはじめとして、親戚知人らに責められました。「母さんに謝れ！」と連れていかれて押んだ母の寝顔の静かさがかなしく、私はそつと母の髪の毛を引っ張ってみました。子どもの頃、朝早くひとり目覚めたとき、かたわらで寝ているかあさんが死んだのではないかと不安になり、髪を引っ張ったことがあったのです。そのときは「うるさいね！」とひどくどつかれて安心したが、今はただ応えない口腔の脱脂綿だけがつかつた……。

ひからびた海星が転がっている

警官に頭を殴られ 彷徨った

砂糖黍うねる南部の道が続いている

あすこに置いてきたものを

いつか引き取りに行こうと思ってきたが

白く乾いた一夏の

それがなんだったのか

今ではどうしても思い出せないのだ

まふゆ

妖怪の一本指

かげろう けぶる まひる の
みちばた しずか に かざす
せつな に こごって しまう
みずからの かげ に そい
からだ を よこたえた まま
みみ を すます かなた の
みしらぬ とりの さえずり
かわいた くちびる で まね
ゆめ ながれ ない よう に
まぶた かたく とじた まま
あせみずくの たね ひとつ

こぶし かたく にぎり しめ

ジャンヌ・ダルクの涙

有働薫

きょうはジャンヌダルクの涙を持参しました

同席の女性が言ったので

いよいよ日本にもジャンヌダルク教会が創られたのか

仏舍利やキリストの衣のように聖遺物は

ジャンヌダルクの場合は涙であるのかと想像した

ジャンヌのからだのものはすべて燃えてしまつて

心臓の一部だけ燃え残って川に捨てられたとも言われる

そういうことはもはやすべて伝説にすぎなく

涙は

赤く

大粒で

ジャンヌは裏切られてのち 涙を流したことはなかったとわたしは思っていた

涙の段階はもうとうに過ぎている

身を捧げるという美しい言葉のなんという恐ろしき

ジャンヌ終焉の地ではるか後の世に

極東の老婦人が旅の土産に買った

ココアパウダーをまぶしたナッツ菓子

真っ赤に

大粒

舌の上で

ゆっくり崩れていった

〈進む〉

T I S A T O

深海を突き進んでゆく

泳げもしないのに さかなになって

ヘッドライトひとつを頼りに

右には とてつもなく 大きな神社の鳥居が

鬱蒼とした 黒い林の中に

無言のまま 生きづいている

左には やがて ファッションホテル

ネオンが眩しい ちかちかと

よこしまな愛が今日も繁殖する

再び 右手には竹林

風もないのに

ざわざわ と さざめく

T字の道路に 辿りつく

右に曲がるべきか

左に行くべきか

ウインカーは 右

いきなり 急ブレーキを踏む

タイヤの軋む音

ハンドルを大きく切って

闇夜の中で とっさに

ジョーズに変身する

海亀のいる温泉

清水鱗造

なぜか閉館である

ぜいたくな電灯が消されて

階段から下に降りざるをえない

一階は風呂になっている

ふと見ると池のようだ

大きいのも小さいのがあって

大きいにはウミガメがいくつか泳いでいる

どろどろとしていなくもない

これは温泉で

南洋のウミガメを

飼育している状態なのだろうか

男がいるので話しかけると

「ああ、これは温泉ですよ」

と言う

裸だがメガネをかけている

バシャと音がするので

少し上を見ると女が

岩がたらい状にえぐれたところにたまった

温泉に仰向けに浸かっている

どうして気づかなかったのだろうか

それからまた今度は風呂の電灯
が消える

風呂のいっぽうの外は

街の路地のようだ

いくつかの小さな電灯が点く

たらい状のところに

浸かりなさいと女が言う

「でもやはり温泉はパンツを

脱がなければ」

と言って下げる

側にいる女が……

(この先はちよつと書けません

ただ風呂の建物の右下方に

工事している何人かの男

が見えてその視線を避けました)

looking at the world through a bulletproof plate glass window

水島英己

海に抱かれた岬がたえまない波の浸食をうけて険しい断崖を歳月の贈り物のように
おのれの姿として落日の下で受け取るとき

クソカズラがその一生をかけてイバラに抱きついているとき

これらの言葉なきものにことばを与えたものが死に絶えるとき

私たちは泣いている

苦しむことが不可能になったせいで泣いている

すべての不可能と可能は防弾ガラスによって透明に隔離されているので

すべての文明は美しい古都を瓦礫に化して私たちを招き入れなければならない

その出来事は私たちが意図して創ったのではない

谷間の村には有毒ガスが噴き上げ、日干しレンガの壁は懐かしいものたちを圧死させる窓の向こうの悪意にむかつてことばなきものたちが発作的な痙攣をひきおこすほどに

「植物の忍耐、動物の優雅さのために」たしかに称賛せよとウイスタンは歌った
たえず出来事は次の出来事に変換され、砂漠・空白のなかでヒトが泣いている
舞い上がる歌も傷もなく私たちは静かに出来事を待ち望む、違う出来事を

洗骨

河合民子

白いウル花枝珊瑚

秘密の欠片

海の祠

黙って行ってあなたを持ち帰る

骨が触ってふわりと夜

風はするりと海へ逃げたよお

闇を這いだすあなたがそろそろり

白くウルウルウル

うる濡れて

浜で抱きあったのは二十歳の月夜

水を撫でた根引きの夜

骨を洗う闇夜は二十九日

黙っていったあなたを洗う

忘れない

けして私

ウルの花咲いたよお

一人でいってさかせたウル花枝珊瑚

私がひろったウルウル珊瑚

さしだした手にくらいついてよ

ウルの花

あなた

あなたの骨のおすましを

そつとしづかにのんだから

あしたは

きつと

黒いパラソルさして

あなたを後生まで送ります

ふりむかないでいってください

わたしの骨を洗うのはだれ

夢の馬

高田昭子

草原を

野生馬の群れが走る
地を揺るがす蹄の音

嘶きと嘶きの交響

風切り裂いて

さらに風が呼び込まれる

立ちすくむわたしの背後から

馬はわたしの西側へと走り抜ける

草原はまた静かになる

濁いた風 吹き渡る

そこは

幼い時から幾度もみた夢の草原

野生馬の辿りつくところには

河があるはずだ

——お前が産まれたところ

——そして小さなからだを洗ったところ

父と母の遠い声が聴こえてくる

わたしは

馬の蹄跡を辿って

草原を一人歩いてゆく

地平線だけの世界

空に手が触れるところ

ここはまだ夢の続きだろうか？

一頭の野生馬が群をぬけて

わたしの方へゆっくりと戻ってくる

つややかなやさしい背

跨るわたしの腿の内側に

波打つ馬の背筋

夢は幾度も揺り戻されるが

わたしは還るところを知らない

忘れっぽい会話

K・A氏に

桐田真輔

海辺で拾った紙筒に
会話のような文章が書かれていたので
指でたどりながら読んでみた。

昨日海辺で

私がひろった箱の蓋には

「これは箱ではない」

と書かれていました。

それでその箱には

何が入っていたのですか。

「昨日海辺で

私がひろった箱には

「これは箱ではない」

と書かれていました。」

と書かれた紙が入っていました。

その箱をどうしました？

そのまま蓋をして

その場においてきたのです。

なるほど

そういえば

ここで紙筒の文章は

一回りして

読み始めた文頭に戻っている。

借りに二人の話者をAとKと名付けるなら、
今度はKの話す番なのだ。

サラサラドライ・ミミーママ（子供用おむつ）といちばんパンツ（大人用）*

青木栄瞳

いぎ、出陣！

さて、お出かけです。おじいちゃま！

ふれあうやさしさのベール・・・エルモア

（エルモアは、高級パルプ100%でつくられています。）

いぎ、出陣！

愛子さんも安心の、外出です。

あかちゃんオムツは、

さらさら、ドライの「ミニミーママ」

おじいちゃまには、大人用の新製品、SUPER「いちばんパンツ」で

お出かけも、ひと、安心、

まだまだ、恋もたのしんでね、

もぐらの、おばさまにも、きをつけて、

アナがあつたら、ころんでね、

(引火をさけるため、火のそばなどにおかないでください??.?.?.?.?.?.?.?.?.?.?)

寸法..たて198mm×よこ228MM??.?.?.?.?.?.?

枚数..400枚(200組)???.?.?.?.?.?

なんの、お話しら???.?

はい、わたしの遠い恋のイルミネーションのお話でした。

(ご自分で、ラクラクはきおろしができます)かしら

きょうは 2003・12・21

あすは、冬至、

世界中の、おじいちゃま、おばあちやまたち、に

メリー・クリスマス AND A HAPPY NEW YEAR!!

わたしは、まだ 20才(はたち)です。

*引用 ティッシュペーパー「エルモア」広告

夕餉

萌木碧水

燈の灯る 夕餉の時は
ひとりが良い

幾つもの
当たり前を
ひとつひとつ
迎る時間が
贅沢なのだ

団欒を
知っているから

とても

近しいものだから

ひとりの夕餉の贅沢を

山盛り

こころを澄ませて

いるのだろう

明日への風を身に矯めて

大きく舵を切る

夕餉という言葉とは

少し不似合いな

ピツツア カプリチョーザを

頬張りながら

ちよつと

ツナが多めかな

と

タバスコを

マラカスのように振って

振り掛けて

自分の速さの

夕餉の時を

楽しんでいる

暖炉の薪は

今日も威勢良く

燃え上がる

明日を啓示する

自然の占い種だ

初出誌 グループわれもこう (代表 蜂須賀和子) 「海嶺」第12号 2003.2.4刊

2003.01.07

南風原

若井信栄

やさしきはウージ（砂糖きび）を揺する風に托し
壁に向かつて投げた石

力まかせで

あたって落ちて

たちまち転がって

あゝ愛の行く末がわかってしまうから

どうしても恋人になれそうもない

桜が咲くともう散ることを想ってしまう

だからよ　　晩くなっても

会いにきてくれたけど

遠すぎるよ　　こんなに近いのに

行き先未定のぼくは人生の栄養が

南風原 はえぼる

足りない駄作の「詩人」だから 憧れてしまうだけ
管理栄養士としての 南風原の風 ウーヅを揺する風

(163・67・21) × (179・93・42)

田中宏輔

●こっちは、178×92×42で、京都在住です。フォトメッセージを見てメールしました。もとめられてる趣旨とは異なりますが、もしよければ連絡ください。

○メールどうも！ 京都のどちらからですか？

●北山です。植物園がすぐ近くです。

○そちらは、関西のどこなんでしょうか？

○市内なんですね。僕は関西じゃないですよ。つくばです。

●関西かなって思っていました。理系なんで、てことはないですけど、つくばって、茨城ですか？ だったら、お会いするのは難しいですね。といっても、そちらがこちらをどう思ってるっしやるか、こちらは特殊な仕事をしているので（文学です。）もし、興味があればありましたら、パソコンで、「田中宏輔」で検索してみてください。同姓同名の者がいますが、文学をしているのは、ぼくだけなので区別はつきます。

○つくばは茨城です。東京からバスで45分くらい。詩を書いているのかな？

●そうです。ありがとうございます。とてもうれしかったです。

○どうして僕なんかにもメールくれたんですか？

●もしも、こんなおっさんでも好意をもってくれたら、と。いやいや、好意をもってもらえるとは思ってませんでした。ほとんどあきらめていました。フォト、とても魅力的でしたので。

○かっこいいなって思いましたよ。関東でもよかったら、よろしくお願いします！ どんな感じの人が、いろいろ教えて下さい！

●音楽は80年代のソウル、ジャズが好きです。名前を訊くのはタブーでしたね。わろかったです。メールで呼びかけるときの名前を教えてくださいなければうれしいです。

○そちらは本名でしょ？ だから本名を教えたんですよ。僕はそういうの気にしないんです。

●そうなんだ。ごめんでした。気をわるくせんといってください。

○いえいえ、で、あそこは仮性包茎かな？

○いや、気なんて悪くしないですよ。ところで、あそこって仮性包茎？ いきなりだけど。

●なぜ？ わかるんですか？ 顔で？

○小説を読んでみたんだけど、この人は仮性包莖かって思っちゃった！ 僕は仮性好きなんですよー！

●仮性包莖が好きだと言われてよろこんでいいのかどうか。ちょっと半泣きです。

○少なくとも僕は仮性が好きなんだから、喜んでいいんじゃないですか？ あそこの画像見てみたいです！

●いま出先で、居酒屋なんで、あとでトイレでとります。だけど、たっていないのですか？ 多分そうなんでしょうね。ぼくにはおくってもらえるんでしょうか？

○僕のカメラ付じゃないんですよ。載せてた画像も友達に撮ってもらったやつで。立ってるのと立ってないの見たいです！ 被ってるやつを。

●めちやくちやはずかしんですが、ほんとにこんなちんぽがええんですか？

○めちやくちやいい感じですよ！ イカ臭いのか好きなんですけど、匂いします？

●それ、ほんまですか？ 泣きたいです。そんなこと言わんとってください。洗わんかったら、においますけど、ほかのひともそうやないんですか？

○画像一つしか来てないっすよー。むいてあるのだけ。むいてないの見たい！

(ちんぽ画像のみ送付)

○いいっすねー。匂いするのマジ興奮します。自分のも洗わないと匂うねー。

(しばらく中断)

○立ってて被ってんの見たいです！

●ちよつと待っててください。でも、ほんまなんです。ほんまにはずかしいですから、ちよつと待ってください。

○恥ずかしいなんて思わないで欲しいなあ。僕はそういうのが好きなんだから、あんまり恥ずかしいって言われるとなんか淋しいなあ。

●わかりました。もう言いませんね。ほんとだってわかりました。いまからトイレに行ってきます。

●いつか画像くださいね。とても魅力的ですから。もしかしたら、Sツケすこしありますか？

(ちんぽ画像添付)

○いい感じですね！ 匂いも嗅ぎたい！ 今も匂いするかな？ てか今度京都に会いに行くよ！

●ぼくも会いたい。めちやくちや会いたい。ほんとに会いたい！！！！

○じゃあ会いに行くよ！ 浪人の身分だから、時間はどうにでもなるからね！ 交通費さえどうにかなれば行けるから。

●交通費のことは、心配しないでほしい。

○心配しないでって？

●失礼な書き方をしました。すいません。交通費はぼくがもつべきか、あるいは折半だと思ったので。でも、年齢から言うと、ぼくがもつべきだと思うのですが、間違ってますか？

○わかりました！ 京大卒？

●同志社です。大学院を出たあと、30才まで聴講しながら、同志社国際高校で10年教えていました。(注、この書き方はおかしい。28歳から10年間教えていたのだが、聴講していた期間は5年間で、教えていた時期と重なるのは、数年間だけである。)

○同志社なんだー！ 敬語じゃなくていいですよ。敬語でメールしたりするの慣れてないんで、なんかぎこちなくなるから。

●ふだんは、予備校で数学を教えています。京都と奈良で。昼の授業だけなんで、六時半には帰ります。

○***っていいいます。一度会ってみたいですね。

●会いたい！ ***に会いたい！ 九月半ばの連休は四連休やけど、

○いや、悪いかなーって。実際の所、僕は無職なんで、お金は無いんですけどね。いき

なり親に、京都に行くって言ってもお金もらえなそうだから、少しずつ余ったお金を貯めれば行けるかなーって思いました。出してもらっても平気なんですか？ それならいつでも行っちゃいますよ。

●うん。交通費のことはまかしてほしい。会いたい人は、ぼくのほうの気持ちもめちやくちやつよいから。

○じゃあマジで遊びに行くよ？

●うん。めちやくちやうれしい。

○じゃあマジ行くよ！ あそこ洗わないでおいで欲しいな！ どんな人なんだろう。どんな人がタイプなの？

●フォト見てびっくりしたんよ。ほんまに好きなタイプやから。メールしても惹かれてる自分がようわかるし。***のほうは、どうなんやろ？

○僕もかっこいいと思ったよ。なかなか遠方の人と知り合う機会ってないからなんだか新鮮だよ！ 会ってみたいね！

●会いたい。九月十日から十五日まで連休なんやけど、十一日の晩からOk。めっちゃOk。ちょっとでもはやく会いたい。

○じゃあ行っちゃおうかなー！

●こんどの金土日は急やろか？

○構わないけど、切符とかどうしたらいい？

●来てくれるときのお金はなんとか都合つけてくれるかな。あとで往復の切符代を受け取ってほしい。それともほかになんかええ方法があるやろか？

○分かった。親にはちよつと言えないから、近所の友達に頼むよ。どんな手段で行ったらしい？

●まず東京駅に行って、新幹線か、夜行バスに乗って京都駅に来て、京都駅に着いたら、そこで地下鉄に乗り換えて北山駅に来てくれたら、北山駅に向かいに行く。行くからね。

○金曜日の朝に着けばいいかな？

●今度の金曜日やったら晩でないと帰ってないけど、十二日の金曜日やったら、朝からOkやで。

○あさつての金曜日に行くよ。大丈夫？

●Ok。あさつての金曜の晩。六時半には帰ってる。京都駅に着く時間がわかったら連絡してほしい。こっちの「I」は、*****からね。北山駅では、4番出口で待ってほしい。そこで電話くれたら迎えに行くから。

○了解。僕のは*****だよ。会うまで、あそこは洗わないで欲しいん

だけど。今日はもう風呂に入った？

●はいってないよ。

○じゃあ、会うまであそこは洗わないで！ 皮剥かないでおいで！

●うん。約束するよ。

○嬉しいな！ 匂い想像してたら立って来ちゃった。

●見たい。

○会ったら見えるよ！ 自分でやって出しても、皮の中はふかないでそのままにしよう。カスとか付いてベトベトのとかめちやくちや興奮する。臭ければ臭いほど興奮するから。

●うん。これから帰って、ちんぽ、こする。いっても、びちよびちよのまま寝ることにする。

○嬉しいな！ 自分は一発やっちゃった。笑

●見たかった!!

○会えば見えるじゃん！

●うん。ほんとや。はやく会いたい。会いたい。

○行くからね！ 楽しみだなあ。京都はほんと久しぶりだよ！

● 近くにすごいいい雰囲気居酒屋があるけど、酒は飲める？ ちなみに、ぼくはたばこはすわんけど、酒は飲むほう。

○ 強くはないけど、少しなら飲めるよ。嫌いってことは無いし。雰囲気のいいお店とか好きだなー！

● じゃ、たべもの中心にしようね。いっしょにいられるんやあ。めっちゃうれしい。ひそかに泣きたいくらいや。

○ 大したこと無い奴だから期待しないでよ。

● すごいタイプなんよ。メールしてほんとによかったなあって思ってる。

(以上で、9月2日のメールは終了。)

偶感二十八

倉田良成

奈良にて、夏

短夜のくらがり越ゆるおもひかな

夕さりのはてなし霞む暑さかな

夏安居やゆゆしき仏も陰の中

夏山や当麻の道の田の匂ひ

うたて此世はをぐらきを／何しにわれはさめつらむ、／いざ今いち度かへらばや、

／うつくしかりし夢の世に、(松岡《柳田》國男)

はるのあめ鋭とき少年は束の間に

露の葉のほのかに苦き人なれや

酒飲めばうたてをぐらき春の人

誰に春のゑひの悲しみ語るべき

木挽町舟よしウイスキー瓶銘

門々に冬きはまりて鬼やらふ

夢中吟五句

晩節を全うしてや草紅葉

くらやみの凄きを歩む枯野かな

たれが屋敷この夕暮のほととぎす

鶏頭やひたすら山羊の肉食ひたかり

雷鳴に色変りゆく葉宇の雨

東大寺にて

花過ぎてなほ降るものや大薨

高ばし伊せ喜にて

こころぎし枉まげて歎あり泥鱒汁

二十六歳のときの杉山神社研究ノートをひらく
産土は従五位下にして春田打つ

正岡子規は若くして死んだ叔父のような懐かしさがある。九月十九日快晴
むかしをとこ壯夫路地にありけり獺祭忌
糸瓜忌や明治の空もかく青き

平成癸未歌仙発句
のぼり来れば昔の匂ふ花苺

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立の空
日た闌くるに夏草となる野の陰り
西行

日野研一郎氏より隠州都万村産高正宗二本贈られる

たぶたぶと隠岐のうねりや秋二升

深更、γを膝に

漸寒へ猫一匹ととももの寂

いまは秋だが

夕映やおもしろき世に端居して

連句仲間、美江さんに初孫誕生

御秘蔵の初音祝へよもゝちどり

偶感

天つ雁見るべきほどの事は見つ

ひぐらしやわれに急ぎのことありて声降る木々も残しゆくかな
蝉のこゑ木々のうれより降りそそぎ昼の沐浴みの水のさやけさ

駿河昌樹

昨の夜はわれに背ける夢の妻のかなしきまでの若さはかなし

小鳥

足立和夫

ぼくのからだの穴のなかで

ひとつの硬い記憶が

ふっと見え始める

小学六年生だったか

友達の部屋で

仲間三人くらいで遊んでいた

部屋のすみに鳥かごがあり

一羽の生き物が世界から封印されている

静かだった

ぼくはそこを見なかった

それが何であるかわからなかった

ところが突然

生き物が飛び出してきて

空を切り裂き

翼の音が部屋の空気をつらぬいた

異形の叫びが耳に突き刺さる

友達が鳥かこの封印を解いたのだ

恐怖がこころのなかで爆発した

その眼は

ぼくの眼に通じていない

止まり木に戻ったその足は

爬虫類のようでもあり

異物であった

決して和解できない存在である

ぼくは恐怖の塊を取り除くことができない

そのとき驚きと共にわかったのだ

世界という存在はついに異形そのものなのだ

理解を割ってしまうものであり

その生き物とは世界が異形であることの

告知者なのだ

ぼく自身がおぞましくもその生き物なのだ

すべては説明できないと知った

説明とは人間が発見した儀式なんだ

生きつづけていくための

欠片を踏んで

—ある新聞配達の少年に

関富士子

錆の浮いたペダル
やわなハンドルがぐらつく
膨らんだ腿の筋肉で漕ぐ
暗い短水路を潜っていくみたいだ
濡れたアスファルトが流れている
助走から気合を入れる
いざこざはごめんだ
無慈悲な真夜中の街路で
丸腰のまま殺されたくない
後ろの荷物は三十キロの紙束だ
だれに渡すのかなんて考えたこともない

マシンの古ネジが抜けそうに震える

都市をじぐぎぐに走っていく

低いノイズがいつも耳に響く

ぼくたちは家族としてふるまえない

空になった母の胸から全速力で遠ざかり

ホイールがしんしんと鳴り始めるころ

薄明るいターミナルビルの陰に

われを忘れた父がうつぶせている

変わることができるのはぼくだけだ

コイルを巻き付けた少女の胴体が

パーティの灯りに近づくととき

朝の可憐な友人たち

君らは正課を取るために教室に向かうんだ

日常の暴力沙汰に倦みながら

明けがたまであと三時間

ぼくは細裂かれたカードの女たちを踏んでいく

裸の体にリボンが巻かれている

いつも傷ついている世界に生まれたんだ

舗道に散らばる無数の肉片を越えて

すねに笑いがきたガイコツみたい

はいつくばってベッドに沈むだろう

十時間働きづめの夜明けに

つめたいチキンを食って眠る

昼に目覚めたらペニスを握ってみるだろう

ちぎれて死んでしまったのではないか

* 私たちを愛するという者たちによつて

私たちはつねに切り細裂かれている

空転する擦りきれたゴムタイヤ

クラッシュしたチャリを引きずっていく

だれかヨ一助けてくれ

地まわりにぼこぼこにされた男が

前歯のない血だらけの口ですがつてくる

側溝に荷束が散乱する

百馬力の馬になった気分だ

いつもこうだ助けるってあいつは

言うけどだれに言ってるんだ

何をいったいどうやって

ぼくは途方にくれる

夕方になるとジムに行き

死体の形の砂袋を殴るだろう

道沿いでいつものシャドーを始める

弾けた新しい内臓の欠片

幼子を抱いた家族写真の欠片

ぶちまけられたチキンの欠片

折れた前歯の

分解マシンのネジやボルトやチェーンや

細裂かれたぼくのシャドーの

無数のいまわしい欠片を踏んで

* 高橋睦郎詩集『恢復期』から「地下鉄のオルペウス」より引用
初出誌 鈴木東海子個人詩誌『櫻尺』27号 2003.11.1刊

秋へ、落ちて — 些細な償いについて —

富澤守治

リンゴやかキやブドウなど

夏から秋へ、多くの果実が実るころ

思い出すことが

あとからあとから、多くあつて

どこまでもどこまでも、昔は遠くて

このごろは、つくづく思う

何事も知ってしまったと、白けてしまつてはいけないのだということ

それは実つたつもりで、衰弱した老いなのだということ

群れをつくり、屯して

つまりは壁に寄り添い、街行く人を嘲る若者たちが、老いているように組織に凭れ、自余の人々を区別し、差別する親父やお局たちが組織とは別の階級と序列をつくるように、老いている

この季節は実るか、墮ちるか？

恋したあなたよ

あのころは互いに求め合うことが多くて
あなたも人生の森のなかに消えてしまい
いつか姿が見えなくなつて

(バカなことをした)

遠く、若葉のころの初々しさも

善と悪の、そして肉欲の時代も

すべてをこの果実たちのなかに閉じ込める

夏の始末はそれでよいのか？

そうだよ、取り返しはつかない

あなたはそこまで大人になれたか？

見つめて、揺れる、秋の風を諒して、それでよいのか？

憾み続けた昔、昇る朝日の日々は、もう落日し

世界は果実に収束してしまうのだ

見上げる頭上で廻る旋風！

二人に実るのはただに熟した緑の葉一年を経た！

古い葉音があなたの声のように聞こえる

これは

木々のなか、ただ鳥が舞い立つばかりかもしれない

舞い立つことで、

鳥は少しだけ自由になるだろう

しかし、それで果実は鳥たちの命の糧を
どこまで満たしてくれると、云うのだろう